

看護学生の子どもに対するイメージ変化と小児看護学の授業方法について

上山 和子

小児看護学

Changes of Nursing Students' Image to Children and Teaching Methods of Pediatric Nursing

Kazuko UHEYAMA

(1999年11月10日受理)

看護を学習する者にとって対象を理解することは重要である。小児看護学においても対象を理解するためには、子ども全体をとらえていくことであり、学生のもつ子どもに対する認識が影響してくると思われる。従って小児看護学の学習過程として講義および実習により、学生が子どもに対してもつ認識の変化を知り、それに基づいた授業方法の検討が必要である。

そこで学生のもつ子どもに対する認識をイメージという表現方法で小児看護学の講義、実習後どのように変化するか調査し、小児看護学の授業方法について検討した。

その結果、小児看護学講義前の学生の子どもの接触体験については、1割の学生に接触体験が認められなかった。また、保育所実習、病院実習後、約1割の学生には、子どもに対して好きという印象は認められなかった。学生の子どもに対するイメージとしては、小児看護学講義前は興味的表現が多いが、実習が進むにつれて活動的表現、子どもを取り巻く環境など多岐に渡って表現している。また、学生の子どもに対するイメージは、小児看護学講義前に比べ保育所実習後は、肯定的表現が増える傾向にある。そして、病院実習後は、環境の影響を示す表現が増える。つまり、看護学生の子どもに対するイメージは、実習を通して広がっていくと考える。

はじめに

近年の出生率の低下に伴い、年少人口は減少している。¹⁾ それにより、看護学を学習する学生にとっても子どもとの接触体験は必然的に少なくなる。そして、看護学生（以下、学生とする）にとって子どもとの接触体験の有無は、小児看護学を学習することに影響してくると思われる。看護を学習する者にとって対象を理解することは重要である。対象を理解するためには、子ども全体をとらえていくことであり、学生のもつ子どもに対

する認識が影響してくると思われる。このような背景を踏まえ、対象である子どもを理解するための授業方法の検討が叫ばれている。²⁾ さらに小児看護学実習においても学生が子どもに抱く認識を踏まえた実習指導が求められており、学生の子どもに対する認識を把握する必要がある。

従って、小児看護学の学習過程として講義および実習により、学生が子どもに対してもつ認識の変化を知り、それに基づいた講義内容および実習指導の検討が必要である。

そこで新見公立短期大学（以下、本学とする）

看護学科の学生の子どもに対するイメージが小児看護学の講義、実習後どのように変化するか調査し、小児看護学の授業方法について検討した。

1. イメージの定義

広辞苑⁴⁾によれば、イメージとは、「心の中に思い浮かべる像。全体的な印象」としている。また、新社会学辞典¹⁾によれば、「ある対象について外界からの刺激を受けずに心的に再生された像をいう」としている。

水島⁵⁾によれば、「イメージの世界は、外界や対象を思い浮かべ、イメージすることによって算出される。イメージは、感覚・知覚体験と近似した体験を与える。最もわれわれがイメージとして意識するものは、対象の表像としてのイメージである。このイメージは、自分である対象のイメージを浮かべようとしてそれをイメージしたり、言語刺激により、ある程度自動的に指示対象をイメージしたり、また、身体内部状態の変化によって喚起されたりする。また、体験的認知としてのイメージとして、認知やイメージそのものの知情意不可分性に基づく、それは、その個人なりに体系化され、価値・目的・方法・技術・好み等の要素とその関連性を含むものである」と述べている。

このように体験的認知としてイメージ形成はその後体系化され、その個人に影響を与える。ここでは、イメージを視覚像としてのイメージとし、体験的变化を考える。

2. 研究目的

少子社会に伴い子どもとの接触体験の少ない学生が増加している。そこで、本学の看護学生の子どもに対するとらえかたをイメージという表現方法を用いて調査し、実態を踏まえ小児看護学講義内容の検討および実習指導についての課題を明らかにすることを目的とする。

3. 研究方法

子どもの定義：病院実習においてもほとんど乳幼

児を受け持つことが多いため、今回の子どもとは、就学前の6歳以下の子どもを対象とする。

研究方法：平成9年度に小児看護学を受講した学生を対象に子どもとの接触体験の有無および小児看護学保育所実習（以下、保育所実習とする）後の子どもに対するイメージ、平成10年度に小児看護学病院実習（以下、病院実習とする）後の子どもに対するイメージについて同一学年を2、3年次に縦断的方法で調査した。

調査段階：①小児看護学の講義前に6歳以下の子どもとの接触体験の有無および学生の子どもに対するイメージ（2年次）
②保育所実習後の学生の子どもに対する好感の有無およびイメージ（2年次）
③病院実習後の学生の子どもに対する好感の有無およびイメージ（3年次）
の3段階に分けて質問紙にて調査した。尚、イメージについては、自由記載回答とした。

分析方法：イメージの結果は、学生が記載した表現を肯定的にイメージしている表現（以下、肯定的表現とする）、否定的にイメージしている表現（以下、否定的表現とする）、その他の表現に分類した。また、肯定的表現、否定的表現を内田⁶⁾⁷⁾、草野⁸⁾らによる分類を参考に活動的表現、興味的表現に、また、その他の表現を成長・発達を示す表現、環境的影響を示す表現に細分類した。

3. 結果

子どもに対するイメージから連想される項目は全体で27項目で、小児看護学講義前13項目、保育所実習後16項目、病院実習後20項目であった。その内訳をみると、小児看護学講義前では、肯定的表現6項目（73.4%）、否定的表現7項目（26.6%）、保育所実習後では、肯定的表現10項目（81.7

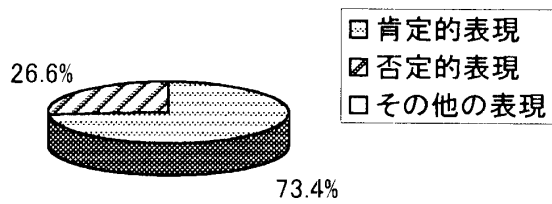


図1. 小児看護学講義前の看護学生の子どものイメージ

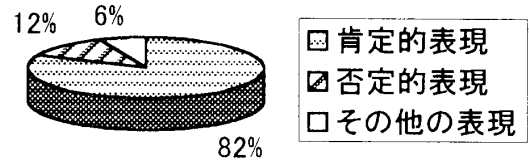


図2. 保育所実習後の看護学生の子どものイメージ

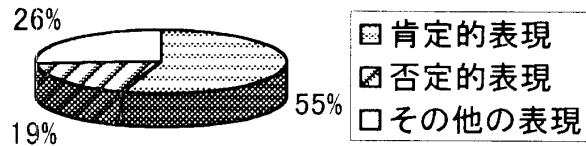


図3. 病院実習後の看護学生の子どものイメージ

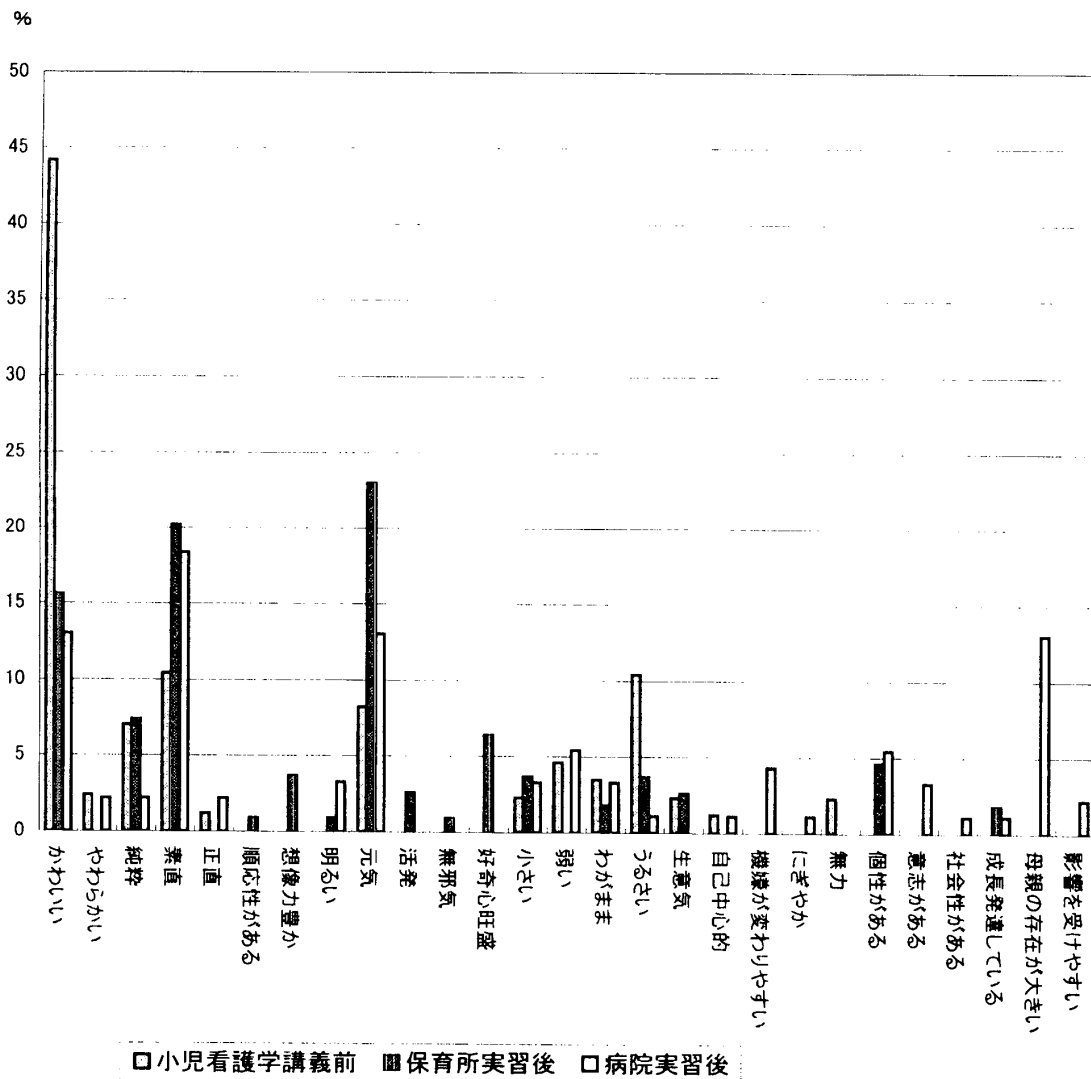


図4. 看護学生の子どもに対するイメージから連想される項目内容の変化

%)、否定的表現4項目(11.9%)、その他の表現2項目(6.4%)、病院実習後では、肯定的表現7項目(54.3%)、否定的表現7項目(18.5%)、その他の表現6項目(26.1%)であった(図1、2、3)。

小児看護学講義前、保育所実習、病院実習とどの段階についても肯定的表現の中では、「かわいい」「素直」「正直」「元気」という表現を共通してイメージしていた。また、否定的表現では、「小さい」「うるさい」「わがまま」という表現を共通してイメージしていた。その他の表現では、保育所実習後、「成長・発達している」「個性がある」などの子どもの成長・発達を示す表現を、病院実

習後は「母親の存在が大きい」「影響を受けやすい」など環境的影響をイメージしていた(図4、表1)。

次に各調査段階の結果をみていく。

1) 小児看護学講義前

回収率は、60人中58人(回収率97%)であった。

小児看護学講義前に実施した学生の子どもの接触体験の調査では、ある52人(90%)、ない6人(10%)であった(図5)。

接触体験内容について記載してあるものでは、近所、兄弟の子どもなどがあげられたが、中学、高校時代のボランティア体験での接触体験をあげる学生もいた。

子どものイメージについての総件数は、86件で

表1. 看護学生の子どもに対するイメージから連想される項目内容

| 分類 | | イメージ | 講義前 接触体験 ある | 講義前 接触体験 ない | 保育所実習後 好印象 はい | 保育所実習後 好印象 いいえ | 病院実習後 好印象 はい | 病院実習後 好印象 いいえ |
|--------|------------|-----------|-------------------|-------------------|---------------------|----------------------|--------------------|---------------------|
| 肯定的表現 | 興味的表現 | かわいい | 33(38.4%) | 5(5.8%) | 17(15.6%) | | 12(13.0%) | |
| | | やわらかい | 1(1.2%) | 1(1.2%) | | | 1(1.1%) | 1(1.1%) |
| | | 純粋 | 6(7.0%) | | 8(7.4%) | | 2(2.2%) | |
| | | 素直 | 9(10.4%) | | 22(20.2%) | | 16(17.3%) | 1(1.1%) |
| | | 正直 | | 1(1.2%) | | | 2(2.2%) | |
| | 活動的表現 | 順応性がある | | | 1(0.9%) | | | |
| | | 想像力豊か | | | 4(3.7%) | | | |
| | | 明るい | | | 1(0.9%) | | 3(3.3%) | |
| | | 元気 | 6(7.0%) | 1(1.2%) | 25(23.0%) | | 11(11.9%) | 1(1.1%) |
| | | 活発 | | | 2(1.8%) | 1(0.9%) | | |
| 否定的表現 | 興味的表現 | 無邪気 | | | 1(0.9%) | | | |
| | | 好奇心旺盛 | | | 7(6.4%) | | | |
| | | 小さい | 2(2.3%) | | 4(3.7%) | | 2(2.2%) | 1(1.1%) |
| | | 弱い | 4(4.6%) | | | | 5(5.4%) | |
| | | わがまま | 3(3.5%) | | 2(1.8%) | | 3(3.3%) | |
| | 活動的表現 | うるさい | 9(10.4%) | | 1(0.9%) | 3(2.8%) | | 1(1.1%) |
| | | 生意気 | 2(2.3%) | | 1(0.9%) | 2(1.8%) | | |
| | | 自己中心的 | 1(1.2%) | | | | 1(1.1%) | |
| | | 機嫌が変わりやすい | | | | | 4(4.3%) | |
| | | にぎやか | | | | | | 1(1.1%) |
| その他の表現 | 成長・発達を示す表現 | 無力 | 2(2.3%) | | | | | |
| | | 個性がある | | | 5(4.6%) | | 5(5.4%) | |
| | | 意志がある | | | | | 3(3.3%) | |
| | | 社会性がある | | | | | 1(1.1%) | |
| | 環境的影響を示す表現 | 成長・発達している | | | 2(1.8%) | | 1(1.1%) | |
| | | 母親の存在が大きい | | | | | 12(13.0%) | |
| | | 影響を受けやすい | | | | | 2(2.2%) | |
| | | 計 | 78(90.6%) | 8(9.4%) | 103(94.5%) | 7(5.5%) | 86(93.4%) | 6(6.6%) |

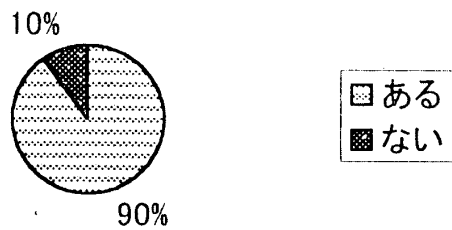


図5. 小児看護学講義前の学生の子どもとの接触体験の有無

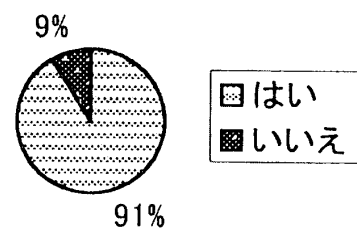


図7. 病院実習後子どもに対して好印象

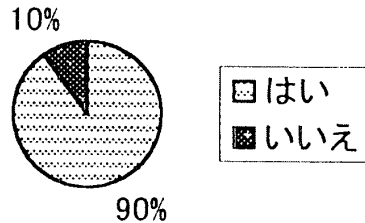


図6. 保育所実習後子どもに対して好印象

あった。一人平均1.5件であった。学生の子どもの肯定的表現としては、興味的表現の「かわいい」が最も多く38件(44.2%)で、次に「素直」9件(10.4%)、「元気」7件(8.2%)、「純粹」6件(7.0%)などが挙げられた。否定的表現としては、「うるさい」9件(10.4%)、「弱い」4件(4.6%)、「わがまま」3件(3.5%)などが挙げられた。接触体験のある学生では、肯定的表現と否定的表現の両方を挙げているが、接触体験のない学生では、肯定的表現だけで、否定的表現は挙げられていなかった。

2) 保育所実習後

回収率は、58人中51人(回収率88%)であった。

保育所実習後、子どもは好きですかという質問に対して、はいと回答した学生は46人(90%)、いいえと回答した学生は5人(10%)であった(図6)。

子どものイメージについての総件数は、109件であった。一人平均2.1件であった。学生の肯定的表現としては、活動的表現を示す「元気」が最も多く25件(23.0%)で、次に「素直」22件(20.2%)、「かわいい」17件(15.6%)、「好奇心旺盛」7件(6.4%)などが挙げられた。否定的表現としては、「小さい」4件(3.7%)、「うるさい」4件(3.7%)、「生意気」3件(2.7%)などが挙げられた。その他の表現として、「個性がある」5件(4.6%)、「成長・発達している」2件(1.8

%)などが挙げられた。

子どもに対して好印象をもつ学生は、肯定的表現、否定的表現、その他の表現と記載が多岐に渡っているが、いいえと回答した学生の記載は、肯定的表現は1件だけで主に否定的表現を挙げていた。

3) 病院実習後

回収率は、56人中47人(回収率84%)であった。

病院実習後、子どもは好きですかという質問に対して、はいと回答した学生は43人(91%)、いいえと回答した学生は4人(9%)であった(図7)。

子どものイメージについての総件数は、92件であった。一人平均2.0件であった。学生の肯定的表現としては、興味的表現の「素直」が最も多く17件(18.4%)で、次に「かわいい」12件(13.0%)、活動的表現の「元気」12件(13.0%)であった。否定的な表現としては、「弱い」5件(5.4%)、「機嫌が変わりやすい」4件(4.3%)、「わがまま」3件(3.3%)であった。その他の表現として「母親の存在が大きい」12件(13.0%)、「個性がある」5件(5.4%)、「意志がある」3件(3.3%)、「影響を受けやすい」2件(2.2%)で、成長・発達を示す表現や環境的影響を示す表現が増えていた。

子どもに対して好印象をもつ学生は、肯定的表現、否定的表現、その他の表現と記載が多岐に渡っているが、いいえと回答した学生は、肯定的表現、否定的表現と均等に挙げているも、成長・発達を示す表現や環境的影響を示すその他の特徴的表現は挙げられていなかった。

4. 考察

1) 実態調査の結果について

(1) 学生の子どもとの接触体験の有無について

今回の調査で、約1割の学生は、子どもとの接触体験がなく、イメージとしても興味的なものをあげているにとどまっている。一方、接触体験のある学生では、活動性を示す「元気」や「活発」などの躍動感を示す言葉が挙げられた。学生は、実際に接触することにより、子ども本来がもっている活動性を知り、興味的イメージだけでなく挙げられたと思われる。

今回、学生の背景について調査していないが、最近の学生は、兄弟姉妹の人数も少なく、地域との交流も少ない。しかし、最近では、中学、高校時代に課外活動としてボランティア体験をしてきた学生が少しずつふえてきており、⁹⁾ そのため、接触体験があると回答した学生が多かったと思われる。

(2) 子どもに対するイメージの変化について

子どもに対するイメージでは、挙げられている各表現の特徴を考えていく。

小児看護学講義前、保育所実習、病院実習とどの段階についても肯定的表現の中では、興味的な「かわいい」という表現が共通して挙げられ、件数も多い。これは子どもの特性的な容姿から受けるイメージが強いと思われる。また、「素直」も3段階とも上位にイメージし、その次に「純粋」をイメージしている。これは、子どもの情緒が成長・発達を通して形成されている段階であるため、このようなイメージが挙げたのではないと思われる。そして、活動性を示す「元気」というイメージがどの段階においても上位にイメージしている。これは、子ども本来がもっている動きからイメージしたものと考えられる。

次に否定的表現の中では、「小さい」をイメージしており、形態的なイメージが強いと思われる。また、「わがまま」「うるさい」というイメージは、子どもは感情を自己コントロールできず表現するために挙げていると思われる。

次に各段階のイメージの特徴を考える。小児看護学前は、接触体験も継続的なものでなく、一時的なものが多いと考えられる。そのため、子どもの容姿的な特性からくる「かわいい」というイメージが多かったと思われる。これは、否定的イメージにも挙げられている「小さい」というイメージも

同様と考えられる。また、活動性を表す「元気」や興味性を表す「うるさい」などは、接触体験から挙げられていると思われる。全体の傾向としては肯定的表現が多いが、否定的表現の中では接触体験も踏まえて子どもがもっている情緒的に不安定な面にも注目していると思われる。

次に保育所実習後では、興味的イメージだけでなく、活動性を示す表現が多くなっている。保育所実習においては、健康な子どもを対象としており、実習において子どもと実際に接し、運動面からの元気さを感じている。そして、集団保育で年齢の違う子どもに実際に接し、「成長・発達している」ことや子どもの「個性がある」ことを知る機会にもなっている。また、実際に遊びなどを通して子どもが創造力を養っていくことを学習する機会になる。反面、集団で接することにより、「にぎやか」であったり、思っている以上に「生意気」という面を知る機会になっている。

しかし、小児看護学講義前に比べ、保育所実習後は、否定的表現が少なくなり、子ども個人がもっている個性や成長・発達を示すイメージをもったことは、保育所実習により子どもは日々成長していく過程を知り、内田らの因子分析の結果¹⁰⁾ と同じように肯定的表現が多くなったと思われる。

次に健康障害をもつ児を対象とする病院実習後では、肯定的表現、否定的表現だけでなく、多岐に表現が挙げられているのは、子どもを容姿的な興味的イメージだけでなく、実際に受け持ち、保育やケアを通して子どもを多面的にとらえられるようになったためと思われる。そして、子どもだけでなく、子どもを取り巻く環境からくる影響について考え、周囲からの「影響を受けやすい」存在とイメージしている。また、入院時には、患児のそばに家族特に母親が付き添っているケースが多く、付き添っている母親に注目が集まり、学生は常に母親の存在を意識していると思われる。否定的イメージの中に子どもの「機嫌が変わりやすい」ことを挙げている。これは、入院中は、子どもの症状が安定しておらず、機嫌が悪い。そのため、学生はたえず注目し、このようなイメージが挙げられたと思われる。また、日々の看護の中で観察の一つに機嫌の状態を項目として挙げているため

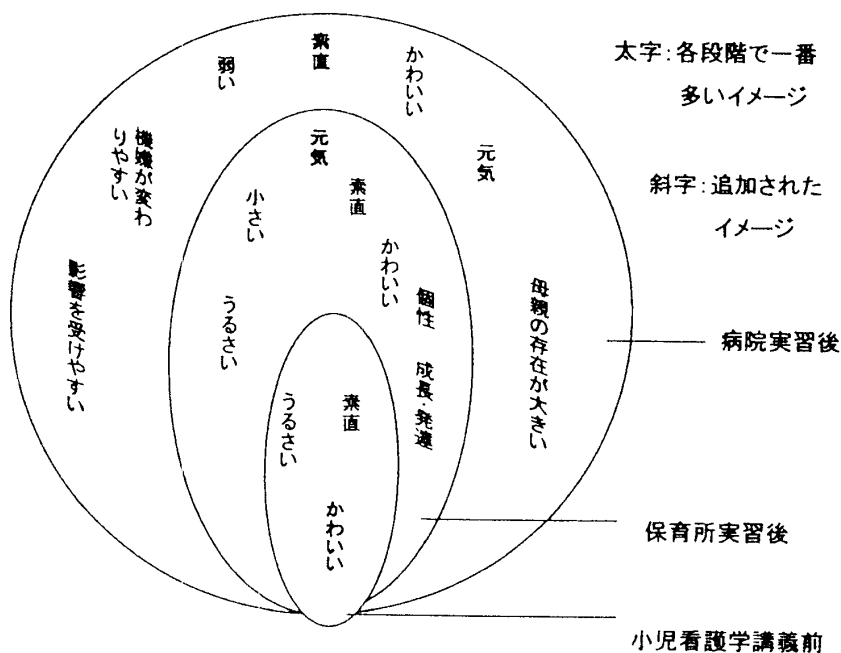


図8. 看護学生の子どもに対するイメージ変化図

とも考えられる。

以上により、小児看護学講義前では、肯定的表現のなかでも容姿などを表現する興味的イメージが多く、保育所実習により、子ども本来がもっている活動性や情緒面について知る機会になり、否定的表現は少なくなると思われる。そして病院実習を通して、子どもは周囲からの影響を受けやすいことや子どものそばにいる家族の存在に注目していくと考えられる。これにより学生は、子どもは自分自身では生きられない、養護されて生きている存在であるという認識をするだろう。つまり、講義では中々理解できにくい、情緒面や子どもを取り巻く環境について考えていくと推測される。その意味からも小児看護学実習の意義は大きいだろう（図8）。

2) 実態を踏まえた小児看護学授業方法の検討

近年、子どもとの接触体験が少ない学生の増加に伴い講義内容の工夫の検討が進められている。¹¹⁾そのため学生が抱えている子どもに対してのイメージを基に子どもがもっている本来の姿をイメージできる授業方法の検討が必要と思われる。

少子社会を反映して接触体験の少ない学生が増

加すると考えられたが、実際には接触体験のある学生が多かった。しかし、その内容は、継続的というより、一時的なものに過ぎない。小児看護学実習前の学生の子どものイメージとして容姿からのイメージが多い。そのため、形態的なものだけでなく、子どもの動きを取り入れた講義内容の検討が必要である。従来から視覚教材としてのビデオの活用があげられる。ビデオにより、形態的イメージだけでなく、子どもの運動機能面についてもイメージできると思われる。

しかし、情緒面など実際に接することにより、学習していく内容も多い。実習により、その内容を深めていくが、そのためには、ある程度、子どもに対する関心を持たせる教育内容の検討が必要と思われる。子どものとらえかたとして部分を観るのではなく、子ども全体をとらえていくことが必要と考えられる。視覚教材を活用しながらも学生が描く形態的特徴を中心とした子どものイメージを子ども本来がもっている強さや弱さをイメージできることが望ましい。そのためには、看護過程の演習だけでなく、他の単元でも全体像を用いた講義を進めていくことが必要だろう。

また、子どもは、自分の言葉で意志を伝えられ

ないという特徴があり、コミュニケーションだけでなく、非コミュニケーションを通して観察するには、子どもをイメージ化しやすい講義内容の検討が必要である。小児看護学の授業として松尾ら¹²⁾は、「子どもをホリスティック（全体性）にとらえていくこと」と述べている。そのためには、子どもをイメージ化し全体的にとらえていく授業方法が必要と考える。

次に保育所実習および病院実習後の学生の子どもに対する特徴をみていくと、保育所実習により、子どもの動きをとらえ、子どもの個性を知っていく。また、病院実習により、子どもの弱さを知り、環境から影響を受けやすいことをとらえている。そして、小児看護学実習を通して子どもに対するイメージが肯定的にも否定的にも広がり、イメージも多様化し、ほとんどの学生が子どもに対して好印象で実習を終えている。

反面、1割の学生は、子どもに対して好印象を持たずに3年次の実習を終えている。強制的に子どものイメージを変えることはできない。しかし、学生にとって小児看護の対象である子どもの存在が恐怖になり、実習の充実感を妨げる要因になるかもしれない。そういう学生は、遠目に子どもの姿を追っており、声かけられないなどの傾向もうかがえる。そのため、事前に学生個々の子どもに対する認識を把握し、個々のケースに応じた実習指導が必要になるとと思われる。

5. 結論

- 1) 小児看護学講義前の学生の子どもとの接触体験では、1割の学生に接触体験が認められなかった。また、保育所実習、病院実習後、約1割の学生は、子どもに対して好感を得られなかった。
- 2) 学生の子どもに対するイメージとしては、小児看護学講義前は興味的表現が多いが、実習が進むにつれて活動的表現、子どもを取り巻く環境など多岐に渡って表現している。つまり、学生の子どもに対するイメージは、実習を通して広がっていくと考える。
- 3) 学生の子どもに対するイメージは、小児看護

学講義前に比べ保育所実習後は肯定的表現が増える傾向にある。また、病院実習後は、肯定的表現、否定的表現だけでなく、環境的影響を示す表現が増える。

- 4) 小児看護学の講義において、学生が子どもをとらえていくためには、学生が子どもに対して持っているイメージをもとに全体性をとらえられる授業方法の検討が必要である。
- 5) 接触体験の少ない学生にとって、対象となる子どもをとらえやすいように学生個々の認識を確認し、個々の状況に応じた小児看護学実習の導入が必要である。

おわりに

今回の研究により、学生のもつ子どものイメージについて全体的な傾向を知ることができた。しかし、接触体験のない学生がどのように変化してきたか、また、実習後子どもに対して良い印象をもたない学生にはどのような要因があるのか知るには、限界がある。今後、調査内容を検討し個々の状況について検討していきたい。

引用文献

- 1) 国民衛生の動向・厚生指標：厚生統計協会、45（9）、43、399、1998.
- 2) 飯村直子他：看護系大学の教育理念と小児看護学の学習目標、Quality Nursing、4（5）、49 - 53、1998.
- 3) 新村出：広辞苑、岩波書店、189、1998.
- 4) 見田宗介他：社会学事典、弘文堂、60 - 61、1996.
- 5) 水島恵一他：イメージの基礎心理学、誠信書房、7、15、1988.
- 6) 内田雅代他：小児看護学実習前、実習後の子どものイメージについて、千葉大学看護学部紀要、11、47 - 51、1989.
- 7) 内田雅代他：小児看護学実習における学生の子どもに対するイメージの変化について、千葉大学看護学部紀要、15、35 - 43、1993.
- 8) 草野美根子他：小児看護実習における看護学生の子どもに対するイメージの変容、第28回日

本看護学会集録・看護教育、143 - 145、1997.

- 9) 平成9年度版青少年白書—青少年問題の現状と対策—：総務庁青少年対策本部編、248、1998.
- 10) 前掲書7)、35 - 43.
- 11) 前掲書2)、49 - 53.
- 12) 松尾ひとみ他：看護系大学における小児看護学の授業の実態と今後の展望、Quality Nursing、4 (6)、45 - 50、1998.

参考文献

- 1) 岩下豊彦：SD法によるイメージの測定、川島書店、1996.
- 2) 佐藤みつ子他：看護教育における授業設計、医学書院、1995.
- 3) 園田悦代他：小児看護実習の評価と指導の方向性Ⅱ、京都府立医科大学医療技術短期大学部紀要、1997.
- 4) 中林雅子他：小児看護学実習における看護学生の子どもへのイメージの変化、第25回日本看護研究学会誌、1999.
- 5) 草野美根子他：看護学生のもつ子どものイメージ形成過程、第25回日本看護研究学会誌、1999.
- 6) 草野美根子他：子供のイメージに関する研究(第2報)、第24回日本看護研究学会誌1998.
- 7) 市江和子：小児看護学において看護学生が子どもに対してもつイメージ変化、第28回日本看護学会集録・看護教育、1997.
- 8) 草野美根子他：子供のイメージに関する研究、第23回日本看護研究学会誌、1997.
- 9) 犬童幹子：教育課程別に見た設定事例に対する学生の感情と言葉による対応の調査、第29回日本看護学会集録・看護教育、1998.
- 10) 舟越和代：看護学生の重度の障害児に対するイメージの変化、第27回日本看護学会集録・看護教育、1996.